

二〇二二年度

恵泉女学園中学校 第三回 入学試験問題

国語（四五分）（全二ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、「ぼく」はイタリアで生まれ育った十代半ばの男の子です。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

音楽院の五年生が始まった。音楽院の五年生は、重要な学年だ。中級最後の年で、六、七年生になると上級のプログラムになるからだ。サンティーニ先生からも、先輩たちからも、「五年生は特に苦しい一年になるぞ」と、さんざん脅されてきた。

最初の個人レッスンで、夏に仕上げた『グラン・ソロ』を吹くと、サンティーニ先生は満足げな表情でうなずいてくれた。

「二日間のマウロ・ビーニのマスタークラスは、きみにとてもいい影響を与えたらしいね。音がとてもよくなったよ。ポリウムもあるし、深みも増したな。それに、そのおかげで表現力もついた。なにより、肺活量がえらく増えたようだな。走ってるのか？」

めずらしくほめられて、<sup>(1)</sup> ぼくは舞いあがりそうになった。

「はい。ずっと、朝晩三十分ずつ走ってます」

「そうか。その成果が出ている。しかし、フルートがね……。今年はプーランクの『フルート・ソナタ』やムーケの『パンの笛』、ライネツケの『バラード』、エネスコの『カンタービレとプレスト』を用意しているんだ。やはりこういうったレパートリーを吹くには、そのフルートではきついだらう。そろそろ、買いかえる時期かもしれないな」

「あの、どうしても……」

先生はわが家の事情を知らない。

「どうしても、買いかえなきやダメですか？　うちはあまり経済的な余裕よゆうがないんです」

サントニーニ先生は、ぼくをじつと見た。

「もちろん、義務ではない」

先生は、小さくため息をついた。

「初心者用のフルートで卒業する生徒も、いなくはない。だがね、<sup>(2)</sup>分岐点ぶんきにおける決意のようなものなんだ。趣味しゅみのレベルならば、あえて国立音楽院コンセルヴァトリーオで学ぶ意味はない。きびしい音楽院に入るのは子どもの頃ころだから、最初は決意なんかないだろう。しかし中期しゅうの修了りょう試験のある五年生にもなれば、プロの演奏家をめざすために音楽院に残るはずなんだ。もちろん、本気でめざしても実際プロになれるのはほんのひと握りにぎだが、最初からめざさないのであれば、なれるはずもない。友だちとも遊ばずほかの習い事もせず、音楽ばかりをやってきたのはなんのためか。これから、五年、六年、そして最終学年と、どんどん時間的にきつくなっていくよ」

「……はい」

先生のいっていることは、よくわかった。まったくそのとおりだ。

でも、決意なんて、きっぱりとできるものじゃない。

「きみはやっと今、最初の壁かべを越えた。これから楽しみなフルーティストになれる可能性を秘めている。しかし残念ながら、そのフルートでは、限界があるんだよ。家の事情は察するよ。ぼくの家もあまり裕福じゃなかったからね。でも、よく考え、おかあさんと話しあってほしい。覚悟かくごを決めて前に進むか、今のままであと三年なんとかやりすごして卒業証書だけをもらうのか。それはぼくが

決めることではないからね」

「はい……」

そのあとの練習曲はそつなくこなしたが、頭の中はもやもやとしていた。

レッスンが終わって防音室を出ると、見慣れた廊下ろうかがいつもより長く見えた。歩いて歩いても、出口にたどりつけそうにない。

夏のあの二日間、ぼくはフルートを吹く喜びを取りもどした。なのにまた、憂鬱ゆううつな考えに押しつぶされようとしている。

マエストロ・ビーニがぼくのフルートを試ためしたときのあの音。マエストロのフルートの音とはぜんぜんちがった。あのスカラ座の

首席奏者が吹いても、やはり音は悪かった。ようするに、今のフルートでは限界がある。それは明白だ。

<sup>(3)</sup>でも、いったいどうすればいいんだろう？

たとえ学割にしてもらっても、七千ユーロ近くする。母の月給の四か月分以上だぞ。そんなものを買ってくれなんて、いえるわけがない。犬の散歩のアルバイトだって、一年やっても、せいぜい五百ユーロだ。犬を四匹ひきにするっていう手もあるけど、村中のポストに広告の紙をなんと入れても、客は増えなかった。しかも夏休みはみんな海に行ってしまうから、バイトも一、二か月中止になってしまう。買いかえるなら、自分が社会人になってちゃんと稼かせいで金を貯ためてからだ。少なく見積もっても、あと十五年はムリだろう。サントイーニ先生の言葉が、ぼくの頭の中でなんどもリピートされた。

覚悟を決めて前に進むか、今のままでとりあえずあと三年やって卒業証書だけをもらうのか。

ぼくには、どうしたいのか、なんて選択肢せんたくしはない。本気で向きあいたくても、そんな高価な楽器を買えるわけじゃないか。ぼ

くはサンドロでもリナでもジャンフランコでもない。なんだかんだいっても両親だけじゃなくて祖父母や親せき一同がすぐそばにいるマルタより、ずっと条件が悪い。

ここまで来たんだ。今のフルートのまま、音楽院の卒業証書はもらおう。大学は、家から通える国立大学の工学部に行つて、ちゃんと稼げる仕事を見つけて、あとは趣味で音楽を続ける。それしかないじゃないか。

I  
というか、それで十分だ。ずいぶんすてきな生き方だと思う。へたにプロをめざして、ろくな音楽家にもなれなくて母に迷惑めいわくをかけたつづけるより、経済的に安定していて、しかも趣味でフルートを続けるなんて、最高だ。

目の前に分かれ道がある。でもいっぽうはふさがっていて、通れない。それは、一本道と同じことだ。ふさがった道をいつまで見ていてもしかたがない。自分が行ける一本道を行こう。

そう思つて大股おおまたで歩いていると、ふいに涙なみだが出そうになった。

くやしいのか、悲しいのか。

いや、悲しいんじゃない。くやしいんだ。怒りいかだ。

生まれた場所とか家庭環境かんきょうとか、肌はだの色とか身体能力とか、そういう「条件」で、人の人生が左右されるのって、おかしいじゃないか。

だれでも同等のチャンスを与えられるべきなんじゃないのか？

努力をするのはあたりまえだけど、最初から努力してもムダだってわかっていたら、がんばることなんかできない。

昔、世界は階級制度だった。身分によって、やれることとやれないことは、最初から決められていた。肌の色がちがうだけで、同じバスや車両には乗れなかった。大名が通れば、そいつが本当はどんなに最低のヤツでも、頭を地面にこすりつけて平伏へいふくしなければならなかった。多くの国で貴族の男しか大学に入れなかった。庶民しょみんは学がないから、支配者階級にいいように支配されっぱなしの、ひどく不条理な世の中だった。

でも、今だって、たいして変わっていないんじゃないか？

ぼくらに選択肢はないのか？

結局、ちつとも自由なんかじゃない。可能性がないなら、禁止されているより質たちが悪いかもしれない。 A からだ。

立ちどまり、目の前に広がる中世の美しい街並みを見つめた。

そして、叫さけんだ。

「わあーっ！」

なんの解決にもならないけれど、叫ばずにはいらなかったのだ。

いっそのこと、「きみには才能がない。やめたほうがいいだろう」といってもらえたら、きっぱりあきらめることができるかもしれない。

(中略…その後、母の誕生日パーティが、母の職場であるレストラン和田で行われることになった。)

その日、母にいわれたとおり、夕方六時にレストラン和田に向かった。母は会場作りを手伝っているはずだ。

店には和田さん夫婦と板前さんと、母の友人三、四人しかいないと思っていた。

ところが、レストラン和田は、満席だった。板前さんだけじゃなくて、パキスタン人とフィリピン人の若い見習いさんたちも残ってくれていたし、トスカーナ日本人会の人たちが大勢来てくれていた。みんなもう席についていた。

ほんの数人の内輪の前で吹くと思っていたから、ちよつと緊張してきた。マエストロ・ビーニのいう「適度な緊張」ってやつだ。

食事はbuffet式になっていて、大テーブルにはお寿司がたくさんあった。ガラス張りの厨房では板前さんたちが忙しく動きまわっている。

母のためにこれだけやってくれているのかと思うと、ぼくは申し訳ないやら、ありがたいやらで、胸が熱くなった。

「では、みなさんお揃いのようなので、始めましょう。今日は特別パーティーです。うちに長年勤めてくれている森さんの就労二十周年記念と、ついでに年齢は忘れたけど誕生日会です。お祝いに、祐司くんのフルーツ・リサイタルつき！ 会費はひとり、ミュージックチャージなしの格安二十五ユーロ！ 食べ放題！ ジュースとお茶とイタリア産ビールは飲み放題！ それ以外の飲み物は別途会計だからね！」

和田さんが大声で叫ぶと、お客さんが笑った。

「んじゃまあ、お料理ができるまで、祐司くんのフルーツを楽しみましょう！」

和田さんが拍手をすると、お客さんもみんな拍手してくれた。

ぼくは頭を下げ、フルートをかまえる。暗譜あんぷしている『シランクス』を、目を閉じて吹いていると、まるで自分とフルートだけの世界にいるような、いつも部屋で月明かりに照らされた丘おかを見ながら吹いているような、あの感覚よみがえが蘇よみがえってくる。

でも今、ぼくはぼくじゃない。パンだ。牧神ぼじんパンは、葦笛あしがえになったシューリンクスを想おもいながら吹く——姿はもう見えないけれど、きみはこうして笛になった。ずっと、ずっと、きみの声と共に生きよう。

そんなパンのせつなさや喜び。

吹きおわって目を開けると、母や和田さんのほか、数人が涙を浮うかべていた。

びっくりした。ぼくの演奏で人を感動させることができるなんて、思いもよらなかったのだ。

そして店内に、拍手が鳴り響ひびいた。

ぼくは深々と頭を下げた。お客さんに喜んでもらえてうれしいのは、夏のマエストロ・ビーニ・マスタークラスの演奏以来だ。

「ブラーヴォ！」

と、かけ声がかかった。ぼくはもう一度軽く頭を下げた。

家で練習してきたとおり、ちゃんとしゃべらなきゃ。人前で話すのは、フルートを吹くより数倍むずかしい。

「では……えーっと、Bしたあと、おめでたい曲を吹きたいと思います。えーっと、ハッピーバースデーの曲ですが、あの、ちよつと勝手に……アレンジしてみました」

ハッピーバースデー変奏曲。最初はシンプルなメロディ。それがどんどん変わっていき、原形を思い出せないぐらいになる。マエ



ストロ・ビーニふうの「エンタメ要素」のために、C するぐらい速いパッセージをたくさん入れた。そして最後にはシンプルなメロディにもどって終わる。楽しくて明るいラスト。

今度はみんな笑顔で拍手をしてくれた。

和田さんの奥<sup>おく</sup>さんがケーキを出してきて、母がろうそくの火を一気に吹き消した。

「二十周年おめでとう！」

「お誕生日おめでとう！」

あちこちから声がかかって、母はうれしそうに頭を下げまくった。

「あー、でも悪いけど、ケーキはあとね。先に料理が出ますからねー。あ、あとね、みなさん、打ち合わせどおり、今、例のやつを進呈<sup>しんていしき</sup>式をやります！」

和田さんがそう叫んだ。

打ち合わせどおり？

意味がわからずに D していると、和田さん夫婦がぼくのほうに歩いてきた。和田さんは手になにか持っている。それは日本でなんだか見たことがある、御祝儀袋<sup>ごしゅうぎぶくろ</sup>というやつに見えた。

「タタターン。本日のメインイベント。はい。これはきみのおかあさんとぼくたちレストラン和田、そしてここにいるみなさんがしてくれた寄付を集めた、七千ユーロです。きみがおかあさんに渡<sup>わた</sup>した犬の散歩のバイト代も全額入ってると思うよ。これでフルート

を買いかえてよ。もっといいフルーツできみの演奏を聴きたいからさ」

「えっ!？」

ぼくは和田さんや店内の人たちを見た。みんなが微笑ほほえんでいる。

心臓がバクバク打って、言葉が出ない。

「あ、あの……」

「きみのおかあさんはね、長年うちの安月給で昼も夜も文句ひとついわずに働いてくれて、明るくてお客さんにも人気でさ、助かってるんだよ。けどね、よく考えたら、二十年間ろくにボーナスを出したことがなかったんだ。ひどい雇やとい主だよね」

「ほんつとひどいよ、和田さん！」

と、だれかが茶化した。

「で、でも……」

「まあ、うちが出したのは半分だけだから。あとはおかあさんのへそくりとね、みなさんのご好意だよ」  
うろたえていると、母が「ありがたくいただきなさい」と、立ち上がっていった。

「あ、祐司くん、そのかわりさ」

和田さんがニヤツと笑って、ぼくの手に厚ぼったい御祝儀袋を押しつけていった。

「年に一回くらい、ここでリサイクルやってよ。どう？ もちろんギヤラなし。ヒヒヒ」

和田さんは楽しそうに笑う。

ぼくは頭を下げた。

涙があふれだして、もう顔を上げられなくなった。

「よし、乾杯かんぱいをして、食べるぞー」

和田さんのひとことでみんなが「かんぱーい！」「いただきます！」と、騒さわぎだした。

<sup>(4)</sup> ぼくはイスに倒たおれこみ、泣いた。はずかしいぐらい、泣いた。

(佐藤まどか『アドリブ』より)

問一 ぼくは舞いあがりそうになった とありますが、「舞いあがる」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア おどろく
- イ うかれる
- ウ てれる
- エ いばる

問二 分岐点 とありますが、ぼくは今、どのような分岐点に立っているのですか。解答欄に合うように答えなさい。

問三 でも、いったいどうすればいいんだろう？ とありますが、たとえを使ってこれと同じ心情を表現している部分はどこですか。これより前から二〇字以内で抜き出しなさい。

問四 I 「 の部分のようにぼくが考えるのはなぜですか。説明しなさい。

問五

A にあてはまる最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 生まれつきの才能がものをいう

イ 禁止よりもひどい差別だ

ウ そもそも自由なんて知らない

エ 自らあきらめなきやならない

問六

B D にあてはまる最も適切な言葉をそれぞれ次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア ぎよつと      イ しょんぼり      ウ しんみり      エ ぼかんと      オ ゆつたり

問七

<sup>(4)</sup> ぼくはイスに倒れこみ、泣いた。はずかしいぐらい、泣いた。とありますが、その理由としてふさわしいものには○、そうでないものには×を書きなさい。

ア 自分と母がみんなに支えられていることを知り、感謝で胸がいっぱいになったから。

イ できれば自分はフルート奏者を本気でめざしたいと、心の底では思っていたから。

ウ フルートを演奏するくらいで、高価なものを買ってもらえることに気づいたから。

エ 自分のフルート演奏が、身近な人をこんなにも喜ばせることができると再確認かくにんしたから。  
オ 自分の知らないところで、母がぼくの夢をみんなに話してしまっていたから。

問八 この文章の特徴とくちようの説明として、最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 様々な曲名を出し、言葉にできないぼく的心情を曲のイメージによって描えがき出している。  
イ 会話を多く用いて、周りの人物の言動に影響されやすいぼくの性格を表している。  
ウ 終始ぼくの視点から語られることで、ぼく的心情の変化がわかりやすくなっている。  
エ カタカナの言葉をちりばめることで、異国でのぼくの奮闘ふんとうぶりを印象づけている。

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

私をはじめて文化人類学の現地調査を体験したのは、大学二年生のときでした。場所は島根半島にある漁村で、一九九六年の夏のことです。そこには日本のどこにもあるような漁港の風景が広がっていました。

ところが集落のお年寄りに話を聞いていくと、まったく予想もしなかったことがたくさん見えてきました。一二〇世帯くらいの集落は、もともとその土地に住んでいた地方と、よそから移り住んできた漁師方に分かれていて、かつてはお祭りも別々にしていました。小さな集落に複雑な歴史があることに驚かされました。

たぶん通りすぎただけではまったく気づかないでしょう。でも、数人のお年寄りから昔の話を聞くだけでも、わくわくするような知らない世界が目の前に開けていく感覚がありました。その「歴史」は、当時専攻しようかと迷っていた国際関係論で学ぶ東西冷戦よりよっぽどリアルに、そして人びとの生活に密着した切実さを感じられるものでした。

なにより私が人に話を聞くことで、一人から聞いた情報が別の人の話とつながって、点と点が線になり、やがて面になって、少しずつ全体像が見えていく。そのひとつひとつの事実を自分で手探りしながら拾い集め、組み立てていくプロセスに、とてもわくわくしました。こんな A の問いを深めることで「世界」を考える学問があるんだ、と感動したことを覚えています。

調査実習には四人の学生が参加していました。公民館の二階で寝泊まりして、網でとれた魚をいただいて自炊しながら、数日間、

各自の調査を進めました。みんな関心はばらばらだし、話を聞く相手も違うので、持ち帰ってくる情報が違う。まったく別のとらえ方でその集落を描いていく。調査者が違えば、描かれる像が違う。(2) 文化人類学は、他のだれでもない「わたし」がやる意味のある学問なんだと感じました。

鳥根半島には有名な美保神社があり、たくさんのお祭りや年中行事が行われる地域として知られています。調査前には『美保神社の研究』（和歌森太郎著）という分厚い本などを読んで勉強し、頭人を中心にして祭りを担う頭屋制という祭祀組織があることを知りました。私はそうした祭りや年中行事がどう行われ、そこで祭祀組織がどのような役割を果たしているか、調査しようと考える計画を立てました。

民俗学の本には「漁業は天候など自然条件に左右されるので、漁民は信仰心が篤く、さまざまな伝統的な年中行事を行ってきた」と書かれている。きっとたくさんのお祭りの伝統行事があるに違いない。それがどうやって組織的に執り行われているのか調べようと意気込んで現地に向かったのです。

着いた当日、まず区長さんに話を聞きました。年中行事に興味があると伝えると、一枚の紙を渡されました。そこには何月何日にどんな行事が行われるかが、一覧にしてまとめられていました。あ、もう知りたいことがわかってしまった……。そんな感じがありました。

しかも話を聞くと、その地区では「頭屋」のことを「当屋」と書いていて、文献の内容とはだいぶ様子が違う。頭人のように組織



の長といった家はなく、祭りを担当する当番を輪番で回している。私は勝手に古くからのしきたりを受け継ぐ神秘的な「祭祀組織」をイメージしていたのですが、祭りを執り行うのはたいへんなので、その役を公平に分担するために当番制にしていたのです。信仰心が篤い<sup>(3)</sup>のだから、みんな熱心に祭りをやっている。そんな前提もいきなり覆<sup>くつがえ</sup>されました。祭りをやるのは「負担」なんだ、と。

本に書かれた知識が現実そのままあてはまらない。いま思えば当然なのですが、当時は文献の内容をたんに「事実」として受けとめていたので、現実の複雑さやとらえがたさに困惑<sup>こんわく</sup>しました。

しかも町までの道路が整備されてからは、漁業より会社勤めの人が増えてきたとか、最近では若い人が祭りに参加してくれないので寂<sup>さび</sup>しい、といった話を聞かされる。「漁村＝信仰心が篤い」という枠組<sup>わくぐみ</sup>み自体が、現地に行つてガラガラと崩<sup>くず</sup>れたのです。

でも話を聞くうちに、もともと調べようとしていなかったことに興味がわいてきました。《集落の男性や女性たちがいくつかのグループを自主的につくっていました。男性のグループは、子どもたちが参加しやすいように、夏のイベントとしてイカダ競争をしたり、クリスマスにサンタの衣装<sup>いしやう</sup>でリヤカーにプレゼントを積んで集落を回ったりする。女性のグループは、地区の独居老人のために週二回の給食サービスをしたり、敬老会でお年寄りにプレゼントする手芸品やお弁当を手作りしたりしている。そうした活動は、いずれも地区内の団結やよそから嫁<sup>よめ</sup>いできた若い女性たちと親睦<sup>しんぼく</sup>を深めることを目的にしています。》

信仰にねざした伝統的な祭礼<sup>けいれい</sup>を継承<sup>けいしょう</sup>するというより、若い人も含<sup>ふく</sup>めているいろんな人が集<sup>つど</sup>い、一緒<sup>いっしょ</sup>に協力して何かをする機会としてイベントが行われている。このことが昔からたくさんの「祭礼」が行われてきたことと通じるかもしれない。

そうやって、地域の伝統行事を「祭礼＝信仰」とは異なる別の視点から考える可能性が見えてきました。人びとが「伝統」を守り受け継いでいるだけでなく、地域がまとまるためにあらたな「伝統」をつくりだしている。そうした活動を年中行事の祭礼と並べて考えてみることを思いついたのです。

文化人類学の現地調査では、こうして最初の計画が思いもなかった方向にずれていくことがよくあります。むしろ、計画どおりの調査をやるなら、現地に行く意味がないとすら言われます。現場に立つと、それまでの先入観や先行研究の枠組みが崩れる。そして耳を傾けた声や目にした出来事から、あらたな見方を手にしていく。

はじめてのフィールドワークで、そのプロセスのおもしろさを体感しました。それは、私の視野がいかに狭せまいかを突きつけられた経験でもありました。それまで知らなかった人びとの営みに足を踏ふみ入れ、目を開かれるなかで、「わたし」という存在が思いがけない方向に拡張していく。まさに、<sup>(4)</sup>フィールドで自分の凝こり固まった小さな殻からからはみだすことができたのです。

(松村圭一郎『NHK出版 学びのきほん はみだしの人類学 ともに生きる方法』より)

問一 「歴史」の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。<sup>(1)</sup>

ア 歴史に「」がついているのは、小さな集落の歩みが、国際関係論で学ぶ歴史上の出来事よりも生き生きとて感じられたことを強調するためである。

イ 歴史に「」がついているのは、歴史から学ぶ姿勢は大事なのに、最近はその重要性が忘れられていることへの危機感を強調するためである。

ウ 歴史に「」がついているのは、国際関係論を専攻するよりも、日本の小さな集落の歴史を学んで将来に役立てようと決意したことを強調するためである。

エ 歴史に「」がついているのは、集落のお年寄りたちから聞いた話は、わくわくするものではあったが、歴史と呼ぶには物足りなかったことを強調するためである。

問二 Aにあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 原寸大    イ 無限大    ウ 実物大    エ 等身大

問三 文化人類学は、他のだれでもない「わたし」がやる意味のある学問なんだとありますが、文化人類学とはどのような学問な

のですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人に頼らず、すべてを自力で解決していかなければならない学問。

イ 自分の関心に基づいて、対象を自分なりにとらえ、描き出していく学問。

ウ 他人の調査内容とは重ならないようにしながら、自分の個性を表現する学問。

エ だれの意見にも惑わされず、自分らしい方法で世界を変えていく学問。

問四 B にあてはまる最も適切な語を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア なさけない    イ そつけない    ウ ぎごちない    エ たよらない    オ あつけない

問五 そんな前提もいきなり覆されましたとはどういうことですか。具体的に説明しなさい。

問六 《 》のような活動を筆者はどのように意味づけていますか。解答欄に合うように本文中から三〇字以内で抜き出しなさい。

問七 (4) フィールドで自分の凝り固まった小さな殻からはみだすことができたのです。とはどういうことですか。説明しなさい。

三、次の①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 富士山登頂はシナンのわざだ。
- ② カンジユクしたくだものはあまい。
- ③ 点数の差をチヂめる。
- ④ 総理大臣がカクギを開く。
- ⑤ 遊園地のユウタイケンをもらう。